九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Risks of Mortality and Airflow Limitation in Japanese Individuals with Preserved Ratio Impaired Spirometry

鷲尾, 康圭

https://hdl.handle.net/2324/6796061

出版情報：Kyushu University, 2023, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International

氏　名：　鷲尾　康圭

論文名：　Risks of Mortality and Airflow Limitation in Japanese Individuals with Preserved Ratio Impaired Spirometry

（日本人地域住民におけるpreserved ratio impaired spirometryと死亡および気流制限のリスクについて）

区　分：　甲

論　文　内　容　の　要　旨

背景：呼吸機能検査でpreserved ratio impaired spirometry（PRISm）を有する者は、気流制限（Airflow limitation、以下AFL）や死亡のリスクが高いことが複数の欧米の研究で報告されている。しかしながら、東アジア地域の人種や民族におけるエビデンスは乏しい。

目的： 日本人におけるPRISmと死亡およびAFL発症との関連を検討すること。

方法： 40歳以上の日本人地域住民3,032人を対象に、毎年呼吸機能検査を行い、中央値5.3年の追跡調査を行った。研究参加者を調査開始時の呼吸機能パターンにより以下のように分類した ： 呼吸機能正常群 （1秒量/努力性肺活量0.70以上かつ対標準１秒量80％以上）、PRISm群（1秒量/努力性肺活量0.70以上かつ対標準１秒量80％未満）、AFL Global Initiative for Chronic Obstructive Lung Disease（GOLD）分類 1 群（1秒量/努力性肺活量0.70未満かつ対標準１秒量80％以上）、AFL GOLD分類 2～4群（1秒量/努力性肺活量0.70かつ対標準１秒量80％未満）。ハザード比および95％信頼区間は、コックス比例ハザードモデルを用いて算出した。

結果：追跡期間中、131人が死亡し、うち22人が心血管病で死亡した。また、218人がAFLを発症した。調査開始時の呼吸機能分類毎の予後を検討すると、PRISm群は、交絡因子を調整後も呼吸機能正常群に比し、総死亡（ハザード比2.20; 95％信頼区間 1.35-3.59）および心血管病死亡（ハザード比4.07; 95％信頼区間 1.07-15.42）のリスクが上昇した。さらに、PRISm群におけるAFL発症リスクは、多変量調整後も呼吸機能正常群に比べ高かった（ハザード比 2.48; 95％信頼区間1.83～3.36）。

結論： 日本人においてPRISmは総死亡および心血管病死亡のリスクが高く、AFL発症のリスク上昇と関連していた。